

# 寄贈図書・個人研究費等返還図書の処理計画

## - 図書のリサイクル -

### 図 書 館

図書館では1999年度より、地下書庫・地下3階スペースなどに保管されていた寄贈図書および各学部等退職教員からの個人研究費等購入図書の返還図書につき、資料を死蔵せず有効利用を図るため、具体的な処理方法を策定し、一部試行の上、2000年3月より実施に移した。

本学図書館に寄せられる寄贈図書は多く、内容も多種多様にわたっている。最近の大口の例をあげると、明治の民法学者岡松参太郎氏の蔵書、作家陳舜臣氏の蔵書と資料、中里介山の甥で作家の伊藤和也氏の蔵書などがある。校友や退職教職員、一般篤志家からの図書寄贈もきわめて頻繁である。これらはそれぞれ、さまざまな事情があって寄贈を申し出てこられるわけであるが、一般的に言って、大量の書物を個人では保管しきれなくなったということではないかと思われる。陳舜臣氏の寄贈の場合は、氏が阪神大震災に遭遇され、身辺に本や資料を置くことの危険を痛感されたという理由であった。

図書館では10年近く前、蔵書を充実させる手段として、退職される教員に呼びかけ、在職中に集めた図書・研究資料、とくに洋書の図書館への寄贈をお願いしたことがある。そのときにはさしたる反応がなかったが、ここ数年、退職教員からの図書の寄贈がふえている。これらは従来、所属箇所の図書室で受け入れるケースが多かったが、最近ほとんど中央図書館に集まるようになってきた。

寄贈図書がふえることは大学にとり、実にありがたいことではあるが、現実問題としては保管スペースにも限りがあり、必要な資料とさほど必要としない資料が混在しているのが実情で、きわめて難しい問題である。とくに、すでに図書館に所蔵されている本が寄贈もしくは返還されてきた場合の処置には苦慮している。また、図書館に受入れる図書についても、受入れるにあたっては目録データ作成のために費用がかかることになり、図書館としては、なるべく厳選して入れたいというのが本音といえる。

従来、寄贈図書を受け入れるにあたって一番問

題となっていたのが、中に含まれる重複本の処置であった。廃棄もできず、さりとて図書館に受入れるわけにもゆかぬ本の山が、大量に倉庫に残るという状態だったのである。

今回、寄贈・返還図書の「処理の流れ」をつくるにあたり特徴的といえることは、重複図書の「出口」を二つ作ったことである。原則として重複図書は図書館には受入れず、古書店へ売却するか、もしくは他図書館等へ寄贈する、この二つのルートのどちらかへ流れてゆくこととした。これは図書館界にあっては画期的なことといえる。

アメリカなどでは図書の管理規程が日本と異なっており、図書館が不要と判断した本はどんどん古書市場に流れている。日本ではまだそうした例はほとんど見られないが、図書館では古書店の連合体であるABAJ(日本古書籍商協会)と話し合い、また学内関係箇所とも検討をかさねて、寄贈図書のうち本館蔵書と重複し、かつ、旧蔵者から処置について一任を受けているものであることを前提として、重複図書を古書市場に流すいうことを試みた。ABAJと覚書を交わし、1999年度から試験的にスタートしている。

一方、返還図書や移管図書などで「早稲田大学蔵書」などの印のあるものについては、海外の協定大学を中心にした他図書館等への寄贈にあてることとした。ここ数年、日本語図書を必要としている海外協定大学図書館等は意外に多く、寄贈の依頼がかなりある。そうした申し出のあるところを中心に検討して、1999年度はドイツ・エルフルト大学図書館に故荻野三七彦元館長寄贈のなかの重複図書1,300冊を寄贈した。先方からはたいへん感謝されている。これも日本に置かれたままであれば死蔵されるしかない図書であり、有効利用してたいへんよい方法である。問題点は図書の輸

送費用を支払う能力のあるところにはしか送れないことと、国によっては通関のために詳細な内容リストが要求される場合があることで、それがネックとなっている。

#### 基本的な処理の流れ

以下に具体的な作業手順を示しておく。

#### 【寄贈図書】

大口の寄贈図書については、受贈の際の寄贈者の意志を確認した上で、まとまったコレクションとして整理するものと、ばらしてよいものとに分ける。寄贈者には原則として館蔵と重複する資料については処理を図書館に一任いただくという条件を伝える。（貴重なコレクション寄贈の場合は別）

和書・洋書・中国朝鮮書・古書に分けた上で、重複調査をおこなう。館蔵と重複するもの、館蔵にないものに分ける。古書（江戸時代以前の刊本・写本）は原則として重複の如何によらず受入れる。

館蔵資料と重複しないものについて選書をおこなう。資料としての価値を判断し、受入れるも

のと不要なものに分ける。

館蔵資料と重複するものについては、原則として売却の対象とする。（ABAJ = 日本古書籍商協会と覚書を取りかわし、2ヶ月に1回程度の頻度で引き渡す。ABAJはこれらを評価分類の上、業者間の市に出し、結果を図書館に報告する）

\*「重複」の定義：基本的に、版の異なるものは重複としないが、本によって個々に判断する。

\* 重複する資料であっても、複数部所蔵したほうがよいと判断したものについてはこの限りではない。たとえば、著者・所蔵者などの署名本、手沢本、限定出版のもの、稀覯本など。

#### 【個人研究費等返還図書】

重複調査（上記と同じ手順でおこなう）

選書（上記と同様）

館蔵資料と重複したものにつき、蔵書印・天印・ラベルの有無を調べる。押印等ないものについては、売却対象に、印やラベルのあるものについては、海外の大学図書館や国内の図書館等への寄贈候補として、本庄分館にストックする。

